えっと福めぐり

毎年旧暦の1月23日に行われる「愛宕山大祭（火渡り修業）」

神秘というエネルギー

807年、平安時代に弘法大師が開基したといわれる明王院。その歴史は神秘のベールに包まれています。「明王院を愛する会」の三谷千城さんにその魅力をお聞きしました。

本堂（国宝）は全体に和様、細部には唐様を用いた折衷様式で、五重塔（国宝）は本瓦葺丹塗の和様です

【明王院】市民がつくった世界一の建立物

本堂は折衷様式の建物として日本最古級。五重塔は日本で5番目に古いとされていますが、奈良の法隆寺などの上位4つはすべて朝廷や皇族などによる公の建築です。しかし明王院の五重塔は、地元の住民たちが一文ずつお金を出し合って建てています。これは世界でも珍しいことで、市民による建立物としては日本一どころか世界一古いと言ってもいいでしょう。

明王院はその昔、常福寺と呼ばれていたのですが、第三代福山藩主水野勝貞が当時の住職を追い出した時に、資料（古文書）がほぼすべて持ち出されてしまったみたいなんです。未だ解明されていないことも多く、神秘的なところが明王院の大きな魅力ですね。

謙虚という自信

江戸時代の面影を今に伝える神辺町。歴史にその名を刻む文化人とゆかりのある建物が多く残っています。そのひとつが菅茶山（かんちゃざん）が開いた廉塾（れんじゅく）です。史跡の保存と顕彰活動に取り組む「菅茶山顕彰会」の代表鵜野謙一さんを訪ねました。

菅茶山肖像画

江戸時代に参勤交代の大名が休泊していた神辺本陣

童謡「夕日」の作詞者葛原しげるを偲ぶ「くずはら祭」

【神辺】地域づくりや人材育成に貢献

菅茶山が活躍したのは江戸時代後期。漢詩人として知名度はとても高かったようです。特に漢詩集『黄葉夕陽村舎詩』の評価は高く、当時のベストセラーにもなっています。菅茶山は学問で社会をよくしていこうと京に上りました。その後34歳で郷里に帰り、その学びを地元の若者に広めるため、黄葉夕陽村舎、後の廉塾を開いたのです。廉塾には地元の若者のほかにも、菅茶山の教えを請いに全国から数百人もの人々が訪れたといいます。欲や権力を持たず、人生80年、地域貢献、社会貢献に生きた菅茶山。その姿は人間の生き方の理想像として、神辺の人々の心の拠り所になっています。

廉塾（国特別史跡）の塾生たちが学問をしていた講堂